

出来事の記録と生の記憶

クロード・ランズマン『SHOAH』をみる



生に降りかかり消えない傷として残る出来事について、
いかにそれを記録する／記憶することができるのだろうか。

クロード・ランズマン（1925 - 2018）によって製作された映画『SHOAH』（1985）は、ナチスによるユダヤ人集団虐殺についての9時間半に及ぶドキュメンタリーである。本シンポジウムでは、『SHOAH』を出発点に映画・哲学・記録実践の観点から出来事を記録する／記憶することについて議論する。「2024年」という今日の状況下において、われわれはいかにして『SHOAH』をみることができるのか。

2024年2月4日（日） 13時～17時30分（口頭発表＋全体討議）

大阪大学人間科学部棟

本館3F 第33講義室＋オンライン（ZOOM）

発表者

中谷碩岐（大阪大学人間科学研究科 共生の人間学研究室）

ランズマン『SHOAH』における特異性の位相

瀧口隆（大阪大学人間科学研究科 共生の人間学研究室）

証言の映画 『SHOAH』における演出と編集

吉成哲平（大阪大学人間科学研究科 環境行動学研究室）

「写真もまた生きている」

—東松照明が生活の現場から証した長崎の被爆者の生と死の意味を受け止めて—

宮前良平（福山市立大学都市経営学部講師）

物語に抵抗する：〈不在〉の想起論に向けて

*当日、タイトルが変更する場合があります

司会 近藤和敬（大阪大学人間科学研究科准教授）



右のQRコードからお申し込みください

<https://forms.gle/DdJgWxpgYVGv8TDh9>

主催 共生の人間学研究室

共催

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACTオープンプロジェクト
「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」（記憶の継承ラボ）

